



財団プログラムの行方

地区ロータリー財団委員会

委員長 **佐藤 俊一**
(大阪鶴見RC)

ご存知のように皆様からの年次寄付は財団本部にてプールされ、恒久基金の投資運用益とともに3年後に50%が地区にもどってきます(DDF基金)。その運用益も驚くほど多額でしたが、最近のアメリカの景気からして利益どころかマイナスになるおそれも将来ありそうです。

DDFは地区で自由に使われるお金として、90年代は国際親善奨学生20名以上を毎年派遣することができました。近年は派遣数は大幅に減少し、昨年は5名、今年は8名とひとけたになっています。DDFは地区補助金、マッチンググラントのような人道的補助金にも使用されるようになりましたが、国際親善奨学生減少の一番の原因は年次寄付金の減少(会員数の減少)、そして以前は60%が地区DDFにもどっていたのが50%になったことにあります。年次寄付金が増加しないかぎり、今後ともDDFは減少しつづけることはまちがいありません。

帰国後の国際親善奨学生は、GSEプログラムの帰国者とともに財団学友としてロータリー家族の一員としてロータリー活動に協力することを期待されています。財団学友を中心とした大阪ネクストロータリークラブが設立されたのは誠に喜ばしいことですが、一方財団学友の組織の沈滞傾向も気になります。活動しているのはごくわずかの財団学友にかぎられており、あまり参加していない財団学友

を推薦クラブが掘り起こし、財団学友会の活性化に協力していただくようお願いいたします。

当地区では従来より教育的プログラムに力をいれてきましたが、世界の潮流としては教育的プログラムよりむしろ人道的プログラムに軸足を移しているようにおもわれます。

財団の使命は「人道的、教育的、文化的交流プログラムを通じて世界理解と平和を達成しようとする国際ロータリーの努力を支援する」とあったものが、2007年規定審議会で採択された内容は「ロータリアンが、健康状態を改善し、教育への支援を高め、貧困を救済することを通じて、世界理解、親善、平和を達成できるようにすること」と変わり、明らかに文化交流プログラムがなくなり、「教育への支援」というのも識字教育のようなプログラムを連想させられます。

そして、優先事項のひとつとして「プログラムの成果も内容も未来の夢計画に沿ったものにする」とあります。

この「未来の夢計画」とはどういったものなのか？

これについては12月12日の地区大会の国際奉仕・財団部門分科会にて、日本からのただひとりの財団管理委員(財団トラスティー)である田中作次氏よりご講演をしていただく予定になっています。財団プログラムの行方について関心あるかたはぜひご参加ください。